

# ＜食と環境＞をめぐる映画

## —専門ゼミナールの授業メモ

日 影 尚 之

### I. はじめに

筆者は専任大学の3～4年次生の学部授業「専門ゼミナール」(題目は「英語圏映画のことばと文化」)において、いつのころからか、3年次2学期の学生に対しては、一定のテーマをこちらで設定して課題映画を選び、学生には1人1本の作品を担当させて、それぞれ担当作品について英語表現および内容・関連事項を調べて報告するよう指導してきた。例えば、平成21年度2学期は「家族」というテーマ設定で、*Kramer vs. Kramer*, *Ordinary People*, *Life As a House*, *American Beauty*, *One True Thing* (『母の眠り』), *Soul Food*, *Don't Come Knocking* (『アメリカ、家族のいる風景』)などについて、報告させた。同様に、平成22年度2学期のテーマは「音楽(家)・ミュージシャン」で、10本くらいの映画を扱った。平成23年度2学期の場合は「メディアと社会」というテーマで *Broadcast News*, *Wag the Dog*, *The Insider*, *Social Network*, *The Truman Show*, *Quiz Show*, *Untraceable* (『ブラック・サイト』)などを扱った。

平成24年度2学期の場合は、テーマを「食と環境」と設定して *Waitress*, *No Reservations* (『幸せのレシピ』), *Chocolat*, *An Inconvenient Truth*, *It's Complicated* (『恋するベーカリー』), *Julie & Julia*, *My Blueberry Nights*, *Fast Food Nation*, *Food, Inc.* などを取りあげた。学生に対しては、授業内での報告(プレゼンテーション)を踏まえて、期末レポートとして2種類の課題を与えた。

(1) 食をめぐる映画のセリフ(英語表現)を5か所以上挙げて解説しなさい。

(2) 授業で扱った映画作品(複数本)について、食をめぐる様々な問題の観点から、1,000～2,000 字の日本語で述べなさい。(例) 食べ物を楽しむこと、料理すること、料理によって自分および人を喜ばせること、食卓を囲みコミュニケーションすること、食べ物に関する子ども時代の記憶、食べ物(料理)を通じた自己表現・自己実現、食品の製造・流通・販売・消費のプロセス、食品と(地球)環境、ほか。

学生たちの期末レポートは、個人差はあるものの、概ね誠実なものであったし、紹介された映画のセリフは筆者の参考になるものもあった。本稿は、こうした授業実践のなかで、筆者が興味を覚えたこと——食と映画の関係、食をめぐる様々な問題(社会・環境)、食を扱う映画の内容および英語表現など——について、覚書きとしてまとめてみたものである。尚、本稿で具体的内容に触れる映画は数本にとどまっているが、多かれ少なかれ「食」(あるいは食に関係する環境問題)を扱った映画は枚挙にいとまがないほど多数あることは言うまでもない。だから、参考文献にもある通り、映画のなかの食べ物について書かれた書籍も少なくない。

## II. 食と映画の関係

斉田育秀は映画製作と食品開発の類似について以下のように述べている。

さて、「映画」を作ることと「食品」の新製品開発は、ある部分とても似ています。

ともに一人では作り上げることができません。「映画」でいえばプロデューサーか監督が起点となって、多くのスタッフを動かし作り上げていきます。「食品の開発」も、私のような担当者がプロデューサーの役割を担い、白紙の状態からアイデアを練り上げ、研究部門とも連動し、マーケティングリサーチ、サンプル試作、モニター調査等を経て、デザイン、宣伝、セールスプロモーションという具合に進めていきます。(斉田、p. 301)<sup>1</sup>

斉田は、現代の日本のような高度消費社会における商品としての映画づくりをうまく表現している。個人というよりは、チームとして作品/商品製作を行うこと、受容者である消費者のニーズをよく調査し、そのニーズに合う(売れる)ように作ること、PRをしっかりと行うことなど映画＝商品として当然の

ことをしているということである。当然ではあるがこのことは重要で、本稿でも取り上げる「ファースト・フード」(映画 *Fast Food Nation*) を問題にするならば、それは「ファースト・フィルム」も同様に問題になるということである(Dennis Rothermel)<sup>2</sup>。

また、Margaret H. McFadden は食と映画の関係に関して、食べ物およびその準備(料理)が、映画というヴィジュアル・メディアでとても美しく(美味しく)よく映えること、そして食べ物が魅力的に映る料理の場面に神秘的ともいふべき力を与えていることなどについて、以下のように述べている。

Cinematography is, of course, all about illusion; the eye tricks of color, lighting, and camera angle give the food and its preparation the centrality each film calls for. All three films lovingly portray close-ups of food preparation ... the hand grinding of cacao beans in *Chocolat*. (McFadden, p. 122)<sup>3</sup>

ちなみに、食べ物を表す英語“food”に関連する語としては“feed”, “fodder”(牛馬などの飼料), “foster”(育て)などがすぐ頭に浮かぶが、“food”は“feast”, “festival”という語ともつながっており、少なくとも英語(西欧)の歴史的観点からは、食というものが祝祭つまり(キリスト教などの)宗教的行事と深いつながりを持ってきたということが言える。

### Ⅲ. <食と環境>をめぐる諸問題

#### 1. 食と人間関係

食べ物(料理)がハリウッド映画等に登場する場合、それは多くの場合、様々な意味での人間関係を表現したり、人間関係に影響を与えたりする役割を果たしていると思われる。例えば、映画 *It's Complicated* (『恋するベーカーリー』)では、主人公のシングルマザーJane(メリル・ストリープ)は仕事としてベーカーリーを経営するのみならず、自宅で手作り料理で男性をもてなす。キッチン増築の打ち合わせでやってきた建築家の男性との会話では、“homemade”という語の2つの意味(自家製・手製の、素人くさい)が話題になる。いずれにしても、食(事)・料理は人間関係上の意味——(家族などの団欒、「母の味」、恋愛、親密さなど——を表すものになっている。

ただし、家庭(手作り)料理といっても、食品・料理の科学的・合理的研究

と大企業による食品産業化が特に進展してきたアメリカの場合は、料理の材料は多かれ少なかれ、既製品（典型的には缶詰）などである傾向が強かったことは確認しておく必要がある。家庭信仰が強く、家庭料理は女性の役割とされた保守的な時代、アメリカ 1950 年代についての本間千枝子・有賀夏紀の以下の説明もその参考になるだろう。

五十年代当時は夫が外で、妻が家を守る伝統的な家庭が崇拝され、仕事から帰った夫は家で家族と食卓を囲み、一日の疲れをとることになっていた時代だった。しかし実際には妻も外で働いていることが多く、帰宅した妻は急いで夕食をつくらなければならなかった。そのために合理的に設計された台所、切り刻んだり混ぜたりする作業を楽にする各種の電化製品があり、企業の台所で家政学者による試験済みのレシピ、すぐに使える缶詰や冷凍食品の食材があった。これらの食材をうまく組み合わせることで「独創的」な料理ができたのである。主婦たちは自分で組み合わせを考えることもしたが、多くは企業が教える食品を使ったレシピで料理を作った。（本間・有賀, pp. 205-206）<sup>4</sup>

むろん、本間・有賀も述べるように、そうしたアメリカの食の状況に疑問を感じ、目覚めた人々の動きがやがて始まることにはなるのである。

## 2. フード・ビジネス——大量生産・大量消費、効率・利潤の追求

映画 *Fast Food Nation* や *Food, Inc.* などの映画の眼目は、例えばフード・ビジネスの実態とそのシステムの裏面を暴くことであり、元アメリカ副大統領 Al Gore が自ら登場するドキュメンタリー映画 *An Inconvenient Truth* も、現代の様々な社会システムが地球環境にどれほどの悪影響を与えているかを暴き出そうとしている。このような手法は「マックレイキング」(muckraking) と呼ばれ、Al Gore がこの映画でも言及するように、移民工場労働者の過酷な労働環境の実態を描いた Upton Sinclair の代表的小説 *The Jungle* (1906) がこうした作品の先駆とされる。アメリカ文学・文化にはこうした社会問題を告発する伝統が確かにあるが、著名なアメリカ文学研究者 Cecelia Tichi はさらに遡って、アメリカ文学の代表作 *Moby-Dick* (1851) を引き合いに出し、捕鯨船 *Pequod* 号は捕鯨・鯨解体工場のようなものであり、船上の船乗り＝工場

労働者たちの危険な労働環境を細かく描いている点で労働者文学でもあり、マックレイキングの文化を表現しているという。以下の Schlosser とは、映画 *Fast Food Nation* の原作 *Fast Food Nation: The Dark Side of the All-American Meal* (2001) の作者 Eric Schlosser のことである。

Melville precedes Schlosser by one and a half centuries, but he, too, had specified the danger and risk of the slaughtering-butchered work of whale oil production for lighting and lubrication in the pre-petroleum era. For instance, the thin hemp whale-line, which is tied to the harpoon to be thrust into the unsuspecting whale, must be coiled in perfect “minute spiralizations” free of any tangle or kink. Failure to take this “utmost precaution” can mean the loss of a crewman’s arm, leg, or “entire body” when the harpooned whale dives deep. [...] The work is terribly dangerous, the pitching boat more perilous than the comparable earthly industrial scene of “manifold whizzings of a steam-engine in full play, when every flying beam, and shaft, and wheel, is grazing you.”

(David Haugen and Susan Musser, p. 52)<sup>5</sup>

石油以前の燃料として重要だった鯨の捕獲と解体という労働が、労働者＝船乗りの労働災害と隣り合わせだと説明されている。それは「蒸気機関」で猛烈なスピードとパワーおよび音量を伴って動いていたであろう(例えば繊維)工場のシーンに譬えられているということである。

### 3. 食(料理)とジェンダー

文学・映画その他様々な文化領域に関して研究が進んでいるように、食の問題もジェンダーと関係が深い。大まかに言って、西欧および日本においては(おそらくその他の地域でも)権力としての食糧源の獲得＝男性領域、高度で専門的な料理術＝男性領域、日常的な食事およびその準備(家庭料理)＝女性領域、食欲や美食は「女性のタブー」、スイーツ＝女性、…などである。参考にするべき資料は多いが、例えば、日本文学研究者 Tomoko Aoyama は以下のように述べる。

Certain kinds of food and certain ways of eating are generally regarded as either

feminine or masculine. While meat and offal tend to be categorized as masculine food in many cultures, sweets are usually considered feminine food. More important, the production, preparation, and consumption of food may be regarded exclusively as the preserve of either men or women. In Japan, as in many other countries, men's cooking was confined to the professional sphere until relatively recently, while women were, and to a large extent still are, expected to take charge of the much less glamorous, unpaid work of everyday domestic cooking. [...] Generally speaking, however, there seems to be a clear difference in the attitudes of male and female writers to these issues. We have seen, for instance, many examples of how women's bodies are used to bring food to their families. From the prewar *karayuki-san* to the postwar *panpan* girls, female bodies are inscribed (and even devoured) by the discourse of economic, militaristic, and cultural nationalism. In texts dealing with postindustrial conditions such as Murakami Ryu's *ryori shosetsu*, women are not actually deprived of food, but they themselves are compared to the series of expensive gourmet dishes the male protagonist-narrator consumes.

(Aoyama, pp. 172-173)<sup>6</sup>

Aoyama の主張は、伝統的に男性作家のディスコースでは、女性(の body) は料理という無給労働のために搾取されてきた。女性(の body) は経済的・軍事的・文化的に国家主義により利用・搾取されてきたということである。村上龍の料理小説では女性(の body) は男性の主人公・語り手が買う/消費する高価なグルメに譬えられているというのである。

ジェンダーとは別に、あるいは関連する問題としては、例えば Kyla Wazana Tompkins が研究書を出しているように<sup>7</sup>、食べ物と人種の問題も興味深い点であり、後に述べる映画 *The Help* などについては、その観点からいろいろなことが言えるだろうが、ここでは触れないで次に進む。

#### 4. その他

デボラ・ラプトンおよびダナ・R・ガバッチアの述べることから、その他の問題を拾ってみよう<sup>8</sup>。

##### (1) 商品としての食べ物の文化的価値

自分自身をどのように認識したいか、他者にどのように認識されたいかを反映するように食べ物(商品)を選ぶ。ビッグマックを買うか、高級レストランで食べるかは、どの(文化)集団の一員であることを示す(一人の人物でも表に現われるペルソナがケースによって異なることはある)。その食品(商品)の持つイメージ、象徴的消費。ステータス・シンボル。帰属意識の反映。

(2)食えることと官能性——口と舌は「官能性／自然(味と味蕾)、合理性／文化(言語器官)」を結びつけている。食べ物も言葉も口の中を満たし、いろいろな風味や舌触りを持つ。フロイトのいう「口唇期」など。

(3)食べ物と記憶——失われた／子どものころの思い出、家庭・故郷(ホーム)への思い

特に移民国家アメリカの場合には、人種・エスニシティのアイデンティティの(再)確認として「エスニック・フード」が問題になる。ただ、実際は純粋な「エスニック・フード」「エスニック料理」というよりは、様々な要素が混交していく場合も少なくない。また、それに対して“本物”を求める欲求(消費者の志向)も出てくる。フード・フェスタのようなイベントの対象、観光の呼びものになったりもする。

#### IV. 具体的映画について

ここからは、具体的映画作品 *Waitress* (2007), *No Reservations* (2007), *Chocolat* (2000), *Julie & Julia* (2009), *Fast Food Nation* (2006), *The Help* (2011) についてである。

##### 1. 映画 *Waitress* 『ウェイトレス——おいしい人生のつくりかた』(2007)

主人公の若い女性 Jenna (パイ創作の名人、Joe's Pie Restaurant でウェイトレス)は、強権的な夫 Earl (暴力的) との不幸な結婚生活に幽閉されている状態にある。そこから逃げ出したい潜在的願望を抱き、パイのコンテストに出場して賞金を稼ぐことを夢見てはいるが、“I have nowhere to go.”とあきらめている。そんな折に、(彼女としては必ずしもうれしくない) 妊娠が判明し、どうしたものかと悩んでいる時に、産婦人科の若い男性医師との不倫(主な描写はキス)が始まる。

普段は強権的な夫の前で無力な Jenna だが、パイを作る(創作する)時だけはとても生き生きとしており、至福のひとつとき、別世界にいるようである。

母親の子守唄らしきパイ作りの歌が聞こえ、ゆったりした感じの時間が流れる。オリジナルのパイ創作とその美しいカラーこそがこの映画の興味深い点の1つであり、料理者がパイ生地にはいろいろな具を入れたり、味付けしたりするように、Jenna がその時々の気持ち・気分をパイに込めて、インスピレーションでユニークな命名をすることによく表れている。英語表現としても面白い。

“I Hate My Husband Pie”（夫に対する本当の気持ち）、“Baby Screaming Its Head Off in the Middle of the Night & Ruining My Life Pie”（予想外の妊娠および子育てに対する不安・絶望感）、“Earl Murders Me Because I’m Having an Affair Pie”（産婦人科医との不倫に対する罪悪感）、“I Don’t Want Earl’s Baby Pie”= “Bad Baby Pie” などである。また、Jenna の働くパイ・レストランの年輩オーナー Old Joe（彼女の人生に未来を託し、彼女の恩人になる）は “Strawberry Chocolate Oasis Pie” が大好きなようだ。

ある日、不倫相手の Dr. Pomatter が Jenna 宅にパイづくりを習いにやってくる。これ以前にも医師は彼女の手作りパイを食べている。それは彼女の人生あるいは内面を深く知りたいという気持ちからとも考えられる。彼のセリフはパイ(食)と官能性を結びつけている。

“What you do with food is unearthly. It’s sensual.” (Zimmerman, p. 406 など参照)<sup>9</sup>

結局映画は、主人公 Jenna が夫と別れ、自立して、女友達と夢のパイ店を経営して生きていく姿で終わる。女性監督(かつ脚本・出演)の Adrienne Shelley の現代性ではあるが、パイ・コンテスト出場の資金は彼女の祖父世代の Old Joe の援助で賄われたようである。

## 2. 映画 *No Reservations* (2007) 『幸せのレシピ』

ドイツ映画 *Mostly Martha* (2001) のハリウッド版リメイクである。ニューヨークの高級レストランのシェフ長 Kate は、ほかの男女コックたちに厳しい指示を出す。事故死した姉の娘を引き取るようになった彼女の生活に、Nick という明るいシェフが入ってくことで、彼女の性格が変わっていく話である。以下のステレオタイプな対比が融合し、最後は夫婦で店を経営するようになる。

Kate の方は、厳格、規則に忠実、勝気なキャリアウーマンのシェフだが、



ストレスに悩むのか、カウンセリングを受診している(冷のイメージ)。対するのは、Nick という、明るく、カジュアルで“オペラ曲ノリノリ状態”で料理する。母親から学んだ味を大切にし、イタリアで修業。暖のイメージ。Nick の「家庭的」な味が、Kate の姪の心を癒し、Kate の心をも溶かしていく。スパゲッティを豪快に楽しく食べる場面が印象的である。(Zimmerman, pp. 407-408 参照)

以下の会話は、Kate の料理のファン夫婦と彼女とのやり取りである。

Guest: You're a magician, Kate. And you know my husband sings your praises constantly. In fact, it's hard to not to be jealous.

Husband: I worship anyone who can surprise my palate.

Kate: It's always pleasure to cook for you.

反対に、絶対的自信とプライドを持つ彼女の料理に文句をつける客に対しては手厳しい Kate である。“May I suggest the hot dog stand on the corner. He cooks to order.”と皮肉を言う。

Dennis Rothermel が言うように、ステレオタイプな性格づけおよびやや安易なストーリーづけは、決まった味付けの「Fast Food」と同じように、「Fast Film」と言われるのかもしれない。(Rothermel, pp. 273-274)

### 3. 映画 *Chocolat* (2000)

本稿の最初の方で引用文で示した通り、とろっととろける美しいチョコレートのイメージがとても印象的な寓話的映画である。第二次大戦後のフランスの田舎の村(厳格な禁欲主義を支持する村長が支配する)にどこからともなく流れてきた Vianne と娘。イースター(復活祭)前の Lent (四旬節)にもかかわらず、Vianne がチョコレート・ショップを開店し、村長らと対立しながらも、最終的には、村人の考え方、生き方、人間関係を変え、村を救う(解放する)物語である。

Vianne は薬剤師だったフランス人の父と Maya のある部族の娘との間に生まれた混血であり、エキゾチックなイメージを付与されている。Vianne は店に来た客(村人)に Mayan calendar circle を回転させて、相手の好みを占う。ある女性客(W)の好みを Vianne (V) が聞く場面である。

V: What do you see, Madame, in this? What does it look like? Just say the first thing that comes into your mind?

W: A woman riding a wild horse. Oh, silly answer.

V: Oh, no, there are no silly answers. The pepper triangle, that's for you. A tiny hint of chili pepper to play against the sweetness. Tangy adventure.

James R. Keller や Margaret H. McFadden が述べるように、イースターに向けて展開するこの作品の主人公 Vianne Rocher はこの村の人々に——いわゆる普通の市民だけではなく、社会的な弱者、盗人、アウトサイダーなどにも分け隔てなく——チョコレート(カカオ)という形を通して神的な grace、新たな教え(福音)を届け、救いをもたらすキリストである。特に顕著なのは、夫の DV に悩む Josephine Muscat に逃げこみ寺を提供し、精神的・経済的自立のための技術を与え、生き生きとした表情と姿勢を取り戻させる。また、娘および孫息子との関係が思った通りにいかず悩む糖尿病の年輩女性 Armande の悩みを聞き、チョコレートを通してその人間関係を良好に変えていく。自分の悩みを聞く Vianne に対して Armande が「ここはチョコレート店(chocolaterie)なのか告白室(confessional)なのか、どっちなの？」と聞く場面(Keller, pp. 30-31 参照)<sup>10</sup>は洒落になっているだけでなく、Vianne の庶民的神聖さを表している。Vianne は、チョコレート店に来る人々を招いて Armande の 70 歳の誕生日ディナーを催し、ジブシーらとも一緒にダンスをして皆が楽しめるようにする。Armande もダンスをし、孫との心の交感に満足して帰るが、翌朝、亡くなる。しかし Armande の積極的な生き様は残る人々に生きる勇気をもたらす。そのように考えると、最後の晩餐よろしく、このディナーは、死後の再生(復活)というイースターのイメージにつながる。ヨーロッパの多くの地域でイースターにウサギのチョコレート菓子が売られることのみならず、Keller が詳しく述べるように、Aztec 文化に見られる血=力としてのカカオ(チョコレート)の神秘的イメージは、聖なる世界に属するものである。

本稿で紹介する他の映画のいくつかと似て、<男性=権力・支配=排除>に対して<(自立する)女性=受容=包摂>という流れである。McFadden はこの意味でイエス・キリストに女性性を見る考え方も紹介している(McFadden, p. 119 など)。むろん、映画の最後の方で、Josephine を含めた村人たちがチョコレート店を始める場合、それは男性も女性も隔てはなく、共同参画の作業であるはずである。

#### 4. 映画 *Julie & Julia* (2009)

時代も場所も異なる実在のアメリカ人女性二人の、料理を通じたサクセス・ストーリーをユーモラスかつ可愛らしく描いたこの作品は、料理をマスターしたり、支配する欲望というよりは、料理そのものおよびその食事を「楽しむこと」(joy)を主に描こうとする点で、「男性的」サクセス・ストーリーとは感じが違う。

それは、現代の主人公 Julia Powell(作家になりたかった「アラサー」の公務員)の語りによく表れている。

Julia Child began learning to cook because she loved her husband, and she loved food, and she didn't know what else to do with herself. And, in the process, she found joy.

You know what I love about cooking? I love that after a day when nothing is sure and when I say "nothing" I mean nothing. You can come home and absolutely know that if you add egg yolks to chocolate and sugar and milk, it will get thick. It's such a comfort. (chocolate cream pie を作りながら)

[Y]ou are the butter to my bread, the breath to my life. (気の利いた台詞)

本間・有賀の指摘を紹介しておこう。アメリカの食に革命をもたらしたのは、女性の書いた 1960 年代のアメリカの 3 冊のベストセラーだという。それは Betty Friedan の *The Feminine Mystique* (1963)、Rachel Carson の *The Silent Spring* (1962)、Julia Child の *Mastering the Art of French Cooking* (1961) である。Carson はパッケージ化した食の基盤である、現代農業の化学薬品依存に警鐘を鳴らしたのであり、食と環境の問題を明らかにした先駆者の一人である。Friedan の指摘は、パッケージ化された食品で料理する主婦たちは自分たちの生活も、考え方も、料理の場であるキッチン同様にパッケージ化され、そこに閉じ込められていると気づき始めたことと軌を一にしている。Julia Child は、企業の画一的製品に依存する食のあり方に疑問を感じている女性に食生活のレベルアップを可能にする方法を楽しく教えたし、女性だけでなく料理に関心を持つ男性に対しても、フランス料理に目を開かせた。ジュリア・チャイルドのおかげで、料理に目覚めるアメリカ人が増え、それは食材およびその

生産過程に対する彼らの関心を高めることにもつながったというのである。(本間・有賀, pp. 221-228 あたり参照)

## 5. 映画 *Fast Food Nation* (2006)

映画は、架空の主要登場人物の目を通して、われわれ観客にやや過激な(?) 社会科の校外学習をさせるような作品である。一方は架空の大手ハンバーガーチェーン Mickey's のヒット商品の開発者で、アナハイムの本社から工場や牧場に調査にやってきた Don Anderson、もう一方は、メキシコの不法移民で精肉工場 (Uniglobe Meat Packing 社) で過酷で劣悪な労働環境で働かざるを得ない若夫婦 Sylvia と Raul および Sylvia の妹 Coco らである。さらにもう一方で、Mickey's の店でアルバイトする高校生 April (アンバー) らが正義感から牧場の牛を柵から解き放とうとしても牛たちが動かない場面は、状況の深刻さを表現しようとしている。映画終盤の牛の解体作業 (slaughter) の血みどろの場面も、観客にその残酷さ、過酷さをどぎつく訴えようとする。同時に、若者の登場人物が多く、ノリの良い曲、テンポ良く話を展開するなどの点は監督の特徴なのであろう。メキシコ/アメリカの問題、人物設定、女性の body の搾取など類型化しすぎているが、前にも述べたように、システムの裏面(陰謀)を暴露するマックレイキングのスタイルである。

## 6. 映画 *The Help* (2011)

公民権運動の 1960 年代、人種差別の根強いアメリカ南部 Mississippi 州で差別に対して闘う勇敢な黒人メイドたちの姿を描く。黒人・白人問わず男性(夫)たちの影は薄い、「女性解放」前のジェンダーは強固である。また、フライド・チキンなど(アメリカ南部の)美味しそうな料理が居並ぶ映画の 1 つである。“Housekeeping”(家事)という語が表すように女性束縛の象徴としての家庭空間が主な場面だが、家庭空間の外つまり社会では、公民権運動が渦巻いている。題名の help とは、住み込みの housemaid や奴隷解放以前の houseslave ではなく、貧しい地区から白人家庭に通って家事を取り仕切る黒人メイドのことである。

肝っ玉母さんタイプの黒人メイド Minny は、料理、特にフライド・チキンの名手であり、これはアメリカ南部の黒人メイドのステレオタイプである。Mississippi 州 Jackson 出身の監督 Tate Taylor は、Kathryn Stockett の原作小説を

映画化するにあたって、本物の南部料理人に本物の南部料理を作らせたようである<sup>11</sup>。この作品はアメリカ南部の先輩作家・作品へのオマージュに満ちており、Mark Twain のユーモアおよび自由を求めて飛び出す Huck のイメージ、““Martin Luther King invited the entire country to march with him in D. C. in August. This many Negroes and whites haven't worked together since *Gone With the Wind*.””という台詞、白人女性と黒人男性の接近のタブーを前景化する Richard Wright の *Native Son* (1940)、黒人(男性)の弁護を引き受ける白人およびおてんば娘のイメージは Harper Lee の *To Kill a Mockingbird* (1960) から、などである。

Minnie が意地悪な白人主婦 Hilly に仕返しする手段として使われる chocolate pie についていうと、choco は white に対して colored の意でもあるから、black(黒人)のイメージである。ただ、もう一方の主人公で白／黒の境界を越境する Skeeter は、白人の実母 Charlotte および黒人の育ての母 Constantine 両母の精神の継承者として描かれており、精神的白・黒混血である。Chocolate pie を Hilly が食べることも考えると、この choco は白・黒混合かもしれない。いずれにしても、公民権運動で King 牧師が訴える、人種を超えた連帯 interracial brotherhood というよりは、人種を超えた女性の連帯 interracial sisterhood がテーマである。これは *Waitress* と共通している。

## V. 結び

以上数本の映画しか紹介はできなかったが、グローバル化が進む世界において、食の問題は環境や貧困、政治、人権など、様々な問題と関係の深い問題であることを念頭に述べてきたつもりである。食は学生にとっても日々の生活に関わる身近な問題であり、個人の選択の問題であると同時に社会的な問題でもある。それだけに、複雑な問題ではあるが、様々な形で授業で扱うことのできるトピックであろうと思う。本稿がその一助になれば幸いである。

本稿は、映画英語教育学会(ATEM)東日本支部の平成 24 年度支部大会(平成 24 年 11 月 25 日、麗澤大学東京研究センター)および同学会の平成 25 年度冬季例会(平成 25 年 2 月 10 日、麗澤大学東京研究センター)での口頭発表の内容に加筆・訂正したものである。また、平成 24 年度 2 学期「専門ゼミナール B」に参加してくれた学生諸君にも感謝したい。

注

1. 斉田育秀『映画のグルメ——映画と食のステキな関係——』（五曜書房、2012年）。
2. Dennis Rothermel, “Slow Food, Slow Film,” *Quarterly Review of Film and Video* 26:4 (2009).以下 Rothermel と示す。
3. Margaret H. McFadden, “Gendering the Feast: Women, Spirituality, and Grace in Three Food Films.” In *Reel Food: Essays on Food and Film*. Ed. Anne L. Bower (New York: Routledge, 2004).以下 McFadden と示す。
4. 本間千枝子・有賀夏紀『世界の食文化 12 アメリカ』（農文協、2004年）。以下、本間・有賀と示す。
5. *Social Issues in Literature: The Food Industry in Eric Schlosser's The Fast Food Nation*. Eds. David Haugen and Susan Musser (Farmington Hill, MI: Greenhaven, 2008).
6. Tomoko Aoyama, *Reading Food in Modern Japanese Literature* (Honolulu: U of Hawai'i P, 2008).
7. Kyla Wazana Tompkins, *Racial Indigestion: Eating Bodies in the 19th Century* (New York: New York UP, 2012).
8. デボラ・ラプトン『食べることの社会学』無藤隆・佐藤恵理子 訳（新曜社、1999年）およびダナ・R・ガバッチア『アメリカ食文化——味覚の境界線を越えて』伊藤 茂 訳（青土社、2003年）。
9. Steven Zimmerman, *Food in the Movies*. 2nd Ed. (Jefferson: McFarland & Co., 2010).以下 Zimmerman と示す。
10. James R. Keller, *Food, Film and Culture: A Genre Study* (Jefferson: Mc Farland & Co., 2006) .
11. “The Help: Southern Food.” Food & Wine: Inspiration Served Daily.  
<http://www.foodandwine.com/article/the-help-southern-food>

## 参考文献

- 池上甲一ほか『食の共同体——動員から連帯へ』ナカニシヤ出版、2008年。
- 映画英語教育学会東日本支部 監修『映画英語授業デザイン集』スクリーンプレイ、2012年。
- ガバッチア、ダナ・R『アメリカ食文化——味覚の境界線を越えて』伊藤 茂訳、青土社、2003年。
- 斉田育秀『映画のグルメ——映画と食のステキな関係——』五曜書房、2012年。
- バロー、ジャック『食の文化史——生態・民族学的素描』山内 昶訳、筑摩書房、1997年。
- ピルチャー、ジェフリー・M『食の500年史』伊藤 茂訳、NTT出版、2011年。
- 本間千枝子・有賀夏妃『世界の食文化12 アメリカ』農文協、2004年。
- まつかわ ゆま『シネマでごちそうさま——恋と仕事と、女たち』近代映画社、2009年。
- ラプトン、デボラ『食べることの社会学』無藤隆・佐藤恵理子訳、新曜社、1999年。
- 渡辺祥子『“食”の映画術——映画の中の食べ物から見た世界』近代映画社、2009年。
- Aoyama, Tomoko. *Reading Food in Modern Japanese Literature*. Honolulu: U of Hawai'i P, 2008.
- Belasco, Warren. "How Much Depends on Dinner?" In Warren Belasco and Roger Horowitz, eds., *Food Chains: From Farmyard to Shopping Cart*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2009.
- Hamilton, Shane. "Analyzing Commodity Chains: Linkages or Restaurants?" In Warren Belasco and Roger Horowitz.
- Keller, James R. *Food, Film and Culture: A Genre Study*. Jefferson: McFarland & Co., 2006.
- McFadden, Margaret H. "Gendering the Feast: Women, Spirituality, and Grace in Three Food Films." In *Reel Food: Essays on Food and Film*. Ed. Anne L. Bower. New York: Routledge, 2004.
- Piatti-Farnell, Lorna. *Food and Culture in Contemporary American Fiction*. New

York: Routledge, 2011.

Rothermel, Dennis. “Slow Food, Slow Film.” *Quarterly Review of Film and Video* 26: 4 (2009)

Schlosser, Eric. “Conditions Depicted in *The Jungle* Are Returning.” In *Social Issues in Literature: Workers’ Rights in Upton Sinclair’s The Jungle*. Ed. by Gary Wiener. Farmington Hills, MI: Greenhaven, 2008.

Tichi, Cecelia. “Exposé and Excess.” In *Social Issues in Literature: The Food Industry in Eric Schlosser’s The Fast Food Nation*. Eds. by David Haugen & Susan Musser. Farmington Hills, MI: Greenhaven, 2013.

Tompkins, Kyla Wazana. *Racial Indigestion: Eating Bodies in the 19th Century*. New York: New York UP, 2012.

Zimmerman, Steven. *Food in the Movies*. 2nd Ed. Jefferson, NC: McFarland & Co., 2010.

“The Help: Southern Food.” Food & Wine: Inspiration Served Daily.

<http://www.foodwine.com/articles/the-help-southern-food>